



おもちや 母

「お願い……娘には
いやらしいことしないで……？」

「私をおもちやに
して……いいから……」

ピンポン

「こんちわ
おばさん」

「あれえ、違うでしょ
おばさん、
ちゃんと教えたとおりに
しないと」

「い...いぢやい...」

ニヤ

ニヤ

「...」

「お...お風呂にする？
お食事にする？それとも...」

わたし...?」

「ハハハ
よくできました」



「うわあ、マジかよ？
あのケツ…！」

「エロ〜…！」



はあ

はあ

「な？おっぱいも
娘と違って、巨パイだぜ？」

「や…
いやらし目で見ないで…」

「なに言ってるんだよっ！
見られてるだけで
グッチョグチョじゃねえか」

ぐちゃ

ぐちゃ

「ああっ…
もうやめてえ…！」

プルン

プルン

私は
一週間程前から…

「おら、いいから
黙って乳振ってろっ！」



娘の同級生達に…

「あんっ
ああんっ だめっ
だめえ〜…っ」

おもちゃにされて
います…



あの日彼らが
がやってきたのが…

「はい、
あら、いらっしやい」

「ごめんね、娘は
まだ帰ってないのよ？」

「直に帰ると思うから、
待っててくれる？」

全ての
はじまりでした…





若い彼らに褒められて
悪い気はしませんでした…

「いや、ホントですよ、なあ？」



「もう…」

バカなこと言ってえ
褒めても何も出ないわよ？フフ」

「娘さんから聞いて
ましたよ、きれいだったって…
そのとおりだなあ」

「さ、どうぞ？
今お茶煎れるわね」



それと、彼らが娘の同級生だという
思いで、全く警戒をしていなかった
のです…

それは、突然でした…

「おっばさんっっ!!」

ぽろ

ぽろんっ

「きやつっ!?!」



あまりに突然だったため…

「なっ？
なにっ!？」

「はは、ほら見ろっ!
すげえ乳だっ!
やわらけえ〜!!」

「だっ、だめっ…
だめよっ!やめなさいっ」

もみ
もみいっ

たぶん



私はすっかり気が動転
してしまいました……

「おらおらっ
この乳が悪いんだっ
この乳があつっ!!」

「ああっだめっ、
そこはっ……

乳首はだめなのおろっ!!」



「あ？何でだよ
おばさん」

「よっ……」

「弱いのっ……」

「ちっ乳首っ
いっ弄られっ……ると
んっ……」

「ちゃっ……」

「こんなエロい
乳首してよ」

「感じすぎちゃうのお……
はあはあ んっ」

「はあ」

「はあ」

「くたーって……
なっちやう……のお……」





「うわ、ホントだ
見るこのオバハン、
くったくただ」

はあ

きゅっ

はあ

くりっ

「あっ

あんっ…

ああん…」

びくびく

「ああ…
や…やめへえ…」

びく

「だらしねえ顔だなあ
娘が見たら泣くぜ？」

「ハハハ
おらっ、おら、おばさん
おらおら」

弱いところを執拗に
弄られ、責められて…
私は抗うことが
できませんでした…

「なあ、おばさん
やらせろよ」

「そうそう」

俺ら別におばさん

レイプしたいわけじゃねえし」

くちゅ

「だ…だめえ…」

はあ

はあ

ちゅるる

「そんな反社会的なこと
しねえし、なっ？」

「む、娘には
いやらしいこと
しないでえ」

「そゆーと」

いいだろ？おばさん
じゃねーと、娘やっちやうぞ」

(もうやりまぐってるけど)

娘のため…

娘を守るため…
私は彼らの言いなりにな
るしかありませんでした…

「娘には…
手をださないで…ね？」

はあ

「わかってるよ
おばさん」

はあ

「俺ら約束は
守るしい」

「ほ…ホントね？
ホントに…んっ
ホント…ね？」

ンリ

ンリ

フン

フン



「じゃ、チューしよう
誓いのチューっ!」

「うぐっ」

むちゃくちゃ

ちゃぽっ

ちゃぽっ

「はあ…
んっ…はむっ」

久しぶりの…
それは久しぶりの
キスでした…



「おら、おばさん
こっちもだよ」

「はむうっ」

むちゅっ

「はむ...はむう
はあはあ、じゆる
れる、れるれる
れるおお」

「ああ...はあ
れる、ちゆる、ゴク
れる、ゴク、んぐ
あはあ...ゴク」

「れるれる
じゆる、ちゆるる」

いつしか、自分から
彼らの舌を、唾液を
求めていました...

この子達...
とてもキスが上手...
私は...

若い彼らの唇が、舌が、
唾液が...
私の唇を、舌を、口中を貪り、
唾液を吸い上げ...
乱暴に、しかしときに優しく...
恋人同士のそのように...

そのうちに彼らの関心は
私の下半身へと移りました

「ほらほら、おばさん
じゅんじゅんしてるよ、これ
どうしたの？」

くちゅ

くちゅ

「あ、あんっ
そ、そこは……」



娘の同級生達に…
娘を良く知る彼らに…

「ほおら、どんなに
なってるか見せてもらん？」

「ああ…だめ…
み、見ないでえ…」

「はい、
御開帳」

娘が生まれてきた秘所を
じっくりと見つめられ…

「うっわ、
濡れ濡れえっ！」

くばあ

「おばさん…
濡れすぎっ、ハハハ」



私はすごく恥ずかしくて…
情けなくて…

はあ

「ほら、見ろ、
ぱくぱく言ってるぞ？」

「あ…
ああ…」

「やっぱり人妻だけあって
使いこんでんな」

でも、そんな気持ちと裏腹に
娘を産み落としたソコは…

はあ

若い彼らに見られることが
至上の喜びでもあるかのように、
ぱっくりと口を開け、涎を
垂らし…



彼らに弄られ、
舐められ、吸われ…
舌で転がされ…

「ああ……らめえ……」

刺激されることを
熱望していました…

「ああっ

い……
いい……」

「ええいつ、吸っちゃえっ」

じゅるるるっ

ちゃるっ

ちゃぽっ

「ほら、どうよ

おばさん？

気持ちいいか？ん？

ほら」

「いいっ
あっ いいっ」

まるでそれが私自身の
願いであるかのように…

「うまつ
うまつー」

その後、彼らは
彼らの彼ら自身を、
私の唇と舌で愛撫するように
命じてきました…

「ほら、おばさん
自分だけよくなってないで
ほらっ！」

「は…はい…」

ちゅ…

「…」…「う…?」

久しぶりに触れた…
しかも夫以外の男の
ソレは…



夫のより大きく、
夫のより硬く、
夫のより黒く…
夫のより熱く…

数分後には存分に
味わえ、貫けるであろう
人の妻をおんな想い…
猛々しく、若々しく
反り返るソレは…

残りわずかばかりであった
私の理性を吹き飛ばすのに
十分すぎました…



噎せ返るような
思春期独特の臭い…
先端から先走る青臭い
苦く、すっぱい味…

「おばさん、
何のためにそんな巨パイ
装備してんの？」

「そうそう、そうやって
挟んでしごく以外に
使い途ないんだから、そう」

「ふ…ふおう？
んぐ、んぐっ…
じゅる、ちゅぱっ、じゅぱっ
んぐ、んぐっ」

「はは、
すげえ間抜けッラ！」

私は…
私は、夢中になって
むしゃぶりついていた
のです…



そして…

くちゅ

ぐちゅ

ぐちゅ

くちゅ

「ちゅ…と」

「ほらあ、おばさん
どーする？
挿入れちゃう？
それともやめる？」

「あっ…
ああ…」

「ん？ほら
どーしたい？
言っでごらんおばさん」

「ああ…
は、はやく…」

「ん？なに？」

「焦らさないでえ…
お…お願い…
はあはあ」



そして私は……

「ほおら、挿入^{はい}ったよ
おばさん」

はあ

ちゅる

くちゅ……

はあ

「あつ
あああつ……」

くちゅちゅ……

くちゅつ

「はっ、挿入^{はい}った
挿入^{はい}っちゃ……た……」

彼らに貫かれてしまった
のです……
半ば、自らが望んで……

ぐちゃっ

ぐちゃっ

「おらっ

おらおらあっ!!」

「ああっ あんっあんっ

ああっ…はあはあ」

ぐちゃっ

「どうだ、いいか?

いいのか、おばさんっ!!」

「いつ、いつ

じゅる、ちゅぱ、ふぐ

いいいいっ」

彼らは…

娘の同級生である彼らは…

代わる代わる…
何度も何度も…

わたし
人妻の肉体を…
味わいつくしました…

後ろから、
前から…

上から、
下から…

何度も…



私は何度も貫かれ、
串刺しにされ、
求められ……

「おらっおらっ
どうだっおらっ」

パンッ

「いいっ
ああっ、いいいいっ
もっと……もっとおおっ」

パンッ

そして、私自身も
彼らの肉体を貪欲に
求め、味わったのです……



彼らは何度も
私に排泄しました…

ひやるるるっ

どどっ

「おらっ、孕めっ！
おらあっ！！」

「あああっ
できちゃうっ！
赤ちゃんできちゃうううっ！」

滾る様に熱く、濃厚な
その白濁色の液体を
私は口で、子宮で…
貪るように飲み干しました…

どどっ

彼らの味が、匂いが…
肉体の外に、内に…
染み渡り…

「おらっ！」

口で妊娠しろっ！」

どど
どど

「あ…ヨクヨクッ
…はあ…ヨク…」

ひゃるるっ

今では、目を瞑っても
彼らそれぞれの味を
判別できるほどに…

そして…

夫にすら許したことのない
別の穴までも…

「うおっ

締まるっ!」

「あああっ

そこっ、そこはああっ!」

彼らに捧げてしまい
ました…



娘のため…
そんな気持ち…

「おい、おばさん？
おい」

きゅん

はあ

きゅん

そんな気持ちは
とつくに消え失せていました

「壊れた？ハハ」

んぼ

んぼ

「あ…

ああ…」

久しく忘れていた
女としての悦びに…
心地好く溺れてしまっていたのです

その日から
彼らは毎日やってきます…

「おばさん

団体様のお着きだよおう？」

「は…はい…」

妻であり、母である私を、
おもちゃにするために…

その頃、
娘さんは…

びやるるっ

「おらおらっ

俺の子産め」らあっ！」

どどっ

「あんっ あんっ

ああんっ」

「あれ？あいつらは？」

「あ、熟女狩り」

